
秘密の薔薇をあなたに

黒い夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密の薔薇をあなたに

【Nコード】

N5564G

【作者名】

黒い夢

【あらすじ】

お姫さまが恋人からもらった薔薇の花束。でも美しい薔薇には秘密がつきもので……？『春・花小説』企画参加作品です。表紙・挿絵はふるさまに描いていただきました。

bud

むかしむかし、あるところにお姫さまがいました。

薔薇の花のように優雅で可憐なお姫さまで、国中の人々がお姫さまを愛しておりました。

お姫さまには恋人がいて二人は将来を約束したのですが、お姫さまをたいへん可愛がっていた王さまは二人の仲を認めてくれませんでした。

そのため、二人は密かに逢瀬を重ね、愛の言葉を囁き、お互いの気持ちを深めていったのでした。

けれど、お姫さまは王さまをだまし続けることに罪悪感を感じていました。

そして恋人もまた、お姫さまの苦しみを察していました。

とある夜。

お姫さまの寝室を訪れた恋人が花束を差し出しました。

四本だけの薔薇の花束。

花が咲いているのは白薔薇が一輪だけ。愛情の証に相応しい真っ赤な薔薇は三つともまだ小さな蕾です。

不思議に思ってお姫様に恋人が教えました。

一つの花と三つの蕾の、薔薇の花束の花言葉。

『あのことは永遠に秘密』

第一輪：『永遠に秘密』

恋人は言いました。

『君が苦しんでいることを知っている

僕にはその苦しみから君を救うこともできないとわかっている

でも、例えこのまま許されないとしても

永遠に秘密の恋で終わろうとも

僕の気持ちは決して変わりはしない』

もしもお姫さまも同じ気持ちでいるのなら、どうか受け取ってほしい。

そう言つて恋人が差し出した花束をお姫さまは受け取りました。ぽろぽろと透明な涙の粒がこぼれ落ちて薔薇の花にかかります。

王さまをだまし続ける罪悪感は、まるで茨の棘のようにお姫さまの胸に刺さりチクチクとさいなみ続けます。

ですが、恋人たちの心の中にはそれ以上に大きく美しい真っ赤な薔薇が咲いてしまっていたのです。

恋人から贈られた花束を大切に枕元に飾ったその夜。

お姫さまは不思議な夢を見ました。

白い少女と3人の赤い女の子たちが楽しそうにお茶会を開いている、とっても素敵な夢でした。

次の日。

お姫さまが薔薇の香りとともに心地よく目を覚ますと、可愛がつている侍女が慌ててやってきました。

赤毛が愛らしい小さな侍女の話を聞いて、お姫さまは恋人がお城へ来ることを禁じられたことを知りました。

二人の秘密の恋がばれてしまったのです。

王さまは国で一番偉い人なので命令には誰も逆らえません。

二人の味方は一人もいないのです。きっともう二度と会えないでしょう。

お姫さまは悲しみのあまり泣き出してしまいました。

侍女がなんとか慰めようとしますが、お姫さまの涙は止まりません。その鳴き声を聞いてやってきた王さまや王妃さま、お姫さまのお姉さまが慰めようとしましたが、自分の部屋に閉じこもってしまったお姫さまの顔を見ることがすらできません。

お姫さまはずっとずっと泣いていました。

一日中泣き続けて、やがて疲れて眠ってしまいました。

第二輪：『あなたに相應しい』

お姫さまは不思議な夢を見ました。

昨晚の続きのようなお茶会の夢です。

ですが、今日は白い少女が一人だけでお茶をしていました。

他の女の子たちはどこにいったのだろうと不思議に思っていると、白い少女がお姫さまに気づきました。

『私たちのお茶会へようこそ』

にこりと優しいげな笑みを浮かべお姫さまを席へ案内します。

少女の隣に座り、薔薇の香りのするお茶を一杯いただきました。

香りが良いだけではありません。とても甘くて美味しいお茶で、いつの間にかお姫さまは微笑んでいました。

その笑顔を見た白い少女が言います。

『諦めないで。あなたに相應しいのはあの人なのだから』

心に響く少女の言葉に頷くと、お姫さまは夢から覚めました。

一日ぶりにお姫さまが顔を出し、部屋の前でずっと待っていた赤毛の侍女は泣いて喜びました。

そして、お姫さまに言うのです。

お姫さまのため、王さまの命令に逆らっても二人の恋を応援する
と。

それからの四日間、侍女は本当によく働きました。

いつものようにお姫さまの身の回りの世話をしながら、お城から人知れず抜け出す方法を調べ続けたのです。

そして、ついにはお城の抜け道まで発見してしまいました。

侍女が一度試したのですが、見事に成功し誰にも気づかれずに町に下りることができました。

その知らせを聞いたお姫さまは大変喜び、さっそく恋人に会いに行くことにしました。

準備を終えて侍女について部屋から出ようとした時、ふと枕もとに置かれたままの花瓶に目がとまりました。

白い薔薇の花はそのままに、赤い薔薇の蕾が二つ開きかけています。そつと抜き取り、お守りのように抱いてお姫さまは部屋を出ました。

途中、侍女が恋人の家までの道を覚えていなかったことが分かったりして少々時間がかかりましたが、無事に二人は恋人の家の前まで辿り着きました。

侍女がノックをしようとすると、中から誰か出てくるような気配がします。

もしかしたらお城の兵隊かもしれません。

お姫さまが抜け出していることがばれてしまったのでしょうか？

二人は慌てて近くの植え込みに隠れました。

二人が隠れたちょうどその時、家の中から誰か出てきました。

金髪と青い目をした美しい女性です。

その後からお姫さまの恋人も一緒に出てきました。

恋人たちはそのまま連れ立って外に行ってしまう、お姫さまたちに

は全く気がつきませんでした。

お姫さまはショックでした。

ここ数日、夜もろくにね眠れない程に思っていた恋人が誰とも知れない女性と仲良くしていたのです。

侍女が何か言葉をかけますが耳に入りません。

大事に抱えていた薔薇の蕾を一輪、ドアの前に置くと二人はお城へと戻っていきました。

お城の様子はいつもどおりで、お姫さまが抜け出したことに誰も気がついていないようです。

ですが、お姫さまの元氣のない様子には誰もが気がつきました。

周りの人に心配そうに見つめられながらお姫さまは自分の部屋に入ります。

残った一輪の薔薇を花瓶に戻すと、そのままベッドに倒れこみました。

第三輪：『死ぬほど恋い焦がれて』

またあの夢です。不思議なお茶会の夢。

白い少女に導かれて席についた途端、一人の少女が現れました。

『いつまでもメソメソと泣くのはおよしなさい！』

いつからそこにいたのでしょうか。

色鮮やかな赤——真紅という言葉が相応しいドレスを身に纏った少女が、お姫さまの隣の席に座っています。

射るような瞳でお姫さま見つめ、真紅の少女は言いました。

『あなたはあの人の気持ちを信じていないのですか？』

お姫さまはうつむいてしまいました。もちろん恋人を信じています。でも、先ほど見た光景にどうしても不安になってしまふのです。

こんなに簡単に揺らいでしまう自分が情けないと落ち込むお姫さまに、真紅の少女は毅然として言い放ちます。

信じなさい、と。ただそれだけを少女は言います。

『あの人の言葉に嘘偽りなどありません。死ぬほど恋い焦がれながらあなたを求めてやまないあの人の気持ちを、ただ信ずればいいのです』

まるで責めるかのような口調。

『そんな簡単なことすら、出来ないというのなら——』

けれど、本当はお姫さまを奮い立たせる為の言葉。

『——なぜ、あなたは花束を受け取ったのです?』

真紅の少女の言葉に、お姫さまがあ夜の鮮烈な気持ちを思い出した時。

夢から目覚めました。

久しぶりにぐっすり眠っていたようです。

とてもすっきりとした気分で朝を迎えられました。

侍女を呼ばうと枕もとに置いてあるベルに手を伸ばし、お姫さまは気がつきました。

昨日は咲きかけだった薔薇が見事に花開き、その艶やかな花弁は少女のドレスと同じ鮮やかな真紅に輝いていたのでした。

ベルの音を聞いた侍女が駆けつけてきました。

明るい表情で挨拶をするお姫さまを見て安心したようにため息を吐き、手を引いてとある場所へ向かいます。

お姫さまのお姉さまのお部屋でした。

挨拶もそこそこにお姉さまが説明します。

昨日お姫様が見かけたのはお姉さまの友人で、お姫さまが心配するようなことは何もないのだと。

安堵の表情を浮かべるお姫さまを見て、お姉さまは王さまを必ず説得してみせると約束してくださりました。

可愛らしいピンクのドレスを着て、お姫さまによく似た優しげなお

顔をしたお姉さまは、実は近く隣国の王子さまのもとへ輿入れすることが決まっています。

大切な妹であるお姫さまの恋を叶え、心安らかに嫁いでいこうというのです。

その3日後。

恋人から手紙が届きました。

王さまに認めてもらう為に少しの間旅に出ることになった、帰ってきたら結婚してほしいと書かれたその手紙には、恋人の家の前に置いてきた薔薇が添えられていました。

美しく花開いた、濃くて明るい赤——緋色の薔薇です。

2人の未来もこの薔薇のように明るいのだと喜び、お姫さまは薔薇を花瓶に刺しました。

そして、その夜。

またあの夢を見たのです。

『——幸せになれると思うかい？』

under the rose

お姫さまのもとに手紙が届くまでの間に秘密のお話がされました。

深夜にまで及んだ話し合いが終わったその後。

お姉さまは不安げな顔で何かを言おうとしましたが、決意にあふれた恋人の様子を前にしてなかなか言葉が出てきません。

お姉さまが口を開く前にお姫さまへの手紙を書き終えた恋人は、胸に刺していた緋色の薔薇とともにお姉さまに託します。

受け取ったお姉さまは、本当にお姫様に会って行かなくていいのかと訊きました。

恋人は首を横に振ります。

会えば別れが辛くなる、だから会うことはできない。

どうか今日のことも秘密にしておいてほしい。

何も心配せず、ただ幸福な未来だけを夢見て待っていてほしいと、恋人はそう願いました。

恋人の言葉を聞き、お姉さまにはもうどうすることもできないのだと悟りました。唯一の救いは、お姉さまの友人の女性でしょうか。

お姉さまは彼女に感謝しました。

お姉さまと恋人との橋渡しになってくれただけでなく、一人で旅立とうとした恋人に、一緒に同行すると申し出てくれたのです。

医術の心得がある彼女の存在は、きっと厳しい旅の助けになることでしょう。

涼やかな青い瞳でお姉さまを見つめ、必ず二人で帰ってくるから心配しないでと彼女は言いました。

そして、すでに用意を済ませていた二人は、一刻一秒も惜しむかのような速さでお城から旅立って行きました。

夜の帳の中へ消えていく馬車を見送るのはお姉さまただ一人です。二人の旅の目的を知る者は少なく、わずかに知る者たちはそのあまりの無謀さに眉をひそめ、王さまの逆鱗に触れることの恐ろしさに震えて息をひそめていたのです。

翌朝。

何も知らされずただ愛され続けるお姫さまの手元へ、無事に恋人からの手紙が届きました。全てを知る一輪の薔薇と共に。

第四輪：『陰謀』

『——幸せになれると思うかい？』

お姫様が席についた途端、一人の少女が問いかけてきました。
両隣の白と紅の少女ではありません。

奥の席に座りお茶の香りを楽しんでいる三人目の少女が尋ねてきたのです。

『ここで座って待っていれば幸せになると、本気で思っているのかい？』

濃く明るい緋色のドレスを身につけていながら、どこか冷徹な空気を身に纏っています。

少女はお姫さまを嘲るように、あるいは憐れむように言葉を紡ぎました。

『このままなら、お前の恋人は死ぬだろう』

恋人に訪れる死の予言。思いがけない言葉。お姫さまは返事すらできません。

本当に恋人は死んでしまうのでしょうか？

なぜ死ぬのでしょうか？

緋色の少女は言葉を続けます。

『彼は竜を倒しに行ったのさ。王に認めてもらうために』

竜。百人の騎士が挑んでも鱗に傷一つつけられないという伝説の怪物です。

王はお姫さまとの結婚の条件として無理難題を出し、恋人はお姫さまへの愛の証としてそれを受け入れたのでした。

けれど確実に恋人は死ぬでしょう。どのような奇跡がおきようと倒せない相手、それが竜なのですから。

全ては目障りな恋人を殺すための王さまの策略なのです。

『急げ。王の陰謀を防ぐことだ』

真つ青な顔をしてお姫様が頷いた時、夢は終わりました。

緋の少女は最後までカップから手を離さず、その口元はわずかに笑っていました。

『——例え、どのような手段を用いようともな』

目覚めたお姫様は即座にお姉さまのもとへ向かいました。

侍女の制止を振り払い足音も荒く駆けて行くのです、途中でお姫さまと出会った人はみんな口をばかんと開けて幻でも見たのかと思いました。

それほどにお姫さまは恋人のことを愛していたのです。心配で心配で胸が張り裂けそうでした。

寝起きのところに血相を変えてやってきたお姫さまを見て、お姉さまも大変驚きました。

そして、その口から出てきた言葉、忌まわしく恐ろしい怪物の名前を耳にして、誤魔化すことができませんでした。

お姫さまの恋人は本当に竜退治の旅に出たのです。

お姫さまはすぐに恋人を呼び戻してほしいとお願いしました。

けれど、今二人がどこにいるのかお姉さまは知りません。竜の居場所はお王さまと、王さまからその場所を教えられた恋人だけが知っているのです。

お姫さまは王様のもとへ向かいましたが、涙を流しながら頼んでも教えてくれませんでした。

恋人が竜を倒して戻ってきたら二人の仲を認めてやる。だが、その前に戻ってきたらのなら、どんな理由があろうと決して許さない。

お姫さまにはもっと相応しい相手と結婚してもらおう。王さまはそう告げました。

お姫さまは恋人が生きているのなら他ににもいらないと、顔も見ることのない相手との婚姻を受け入れました。

thorn

王様からのお達しでお姫さまの婚姻を知った恋人は、急ぎお城に戻ってきました。

さつそく会いにいこうとする恋人の前に二つの影が現れます。

お姉さまと侍女でした。

お姫さまは恋人のことが嫌いになったのではなく、恋人のために結婚するのだと伝えたのです。侍女がなんとかしてお姫さまを助けてほしいと願います。

二人の話聞き、恋人はやはり竜を倒して王さまに認めてもらうしかないだろうと考えました。

そのことを青い瞳をした旅の仲間に相談したところ、お姉さまの耳に入り、恋人が勝手に竜のもとへ行かないように牢屋に閉じ込められてしまいました。

もちろん、このことはお姫さまには秘密です。恋人が牢屋に繋がれていると知ったら、倒れてしまうかもしれません。

お姉さまたちはなんとか秘密にして恋人を説得しようとしたのですが、すぐに王さまに知られてしまいました。牢屋を訪れた王さまが喜んで言います。

『姫が無事に婚姻するまでここにいろがよい』

弾むような足取りで王さまは去っていき、お姉さまたちが恋人のもとを訪れるのも、恋人を牢屋から出すことも禁じました。

その後、見張りの目を盗み、小さな侍女がこっそりとやってまいり

ました。

恋人は言います。ここから出して欲しいと。

侍女は断りました。出せば恋人は竜のもとに向かうと知っていたからです。

ですが、恋人の訴えは続きます。

竜を倒し必ずこの城に帰ってくる。

けれど、もし竜を倒せなかったとしても、お姫さまの婚姻はやめさせてほしい。

お姫さまのためなら喜んで死ぬると恋人は言いました。

その言葉を聞き侍女は泣いてしまいます。

お姫さまが愛しているのは恋人ただ一人だというのに、どうしても気持ちがわからないのだろうと、悲しくて悲しくて涙がこぼれてしまったのです。

それ以上何も言えず、侍女は牢屋を後にしました。

毎日毎日、国中がお姫さまの婚姻の準備で大忙しです。

侍女もいっぱいやらなければならないことがあったのですが、日に日に元気がなくなっていきます。

お姫さまは侍女に問いかけました。どうしてそんなに悲しそうな顔をしているのと。

もちろん、お姫さまと恋人のことで胸を痛めていたのです。

侍女は密かに牢屋を訪れていたのですが、恋人の気持ちは少しも変わりませんでした。

そして、お姫さまも毎晩うなされていたり、一睡も出来ず一人でお茶を飲んだりしていることを知っていたのです。

望まぬ婚姻を迫られ、とても苦しんでいるはずなのに、侍女のことを気にかけてくれる優しいお姫さま。

とうとう我慢しきれずに、侍女は全てを打ち明けてしまいました。

お姫さまは王さまのお部屋に向かい、恋人を牢屋から出してほしいとお願いしました。

けれど王さまは、お姫さまが結婚式を無事に済ませた後なら出してもよいと言つのです。

お姫さまは重い足取りで自分のお部屋へと戻っていきました。

その数日後。

とうとうお姫さまは寝込んでしまいました。

間近に迫った婚姻に対する不安と、今も牢屋に繋がれている愛する恋人が心配で、心労のあまり病気になるってしまったのです。

死んだように眠り続けるお姫さまを、侍女が一生懸命看病します。

枕元に置かれた花瓶の水を変えようとして侍女は気がつきました。不思議なことにいつまでたっても枯れない薔薇の花、その最後の一輪がついに咲き始めようとしていたのです。

第五輪：『恥ずかしがりや』

お姫さまはとつても深く暗い場所にいました。とても長い間、出口を求めて歩き続けているのです。

ここが夢の中であることも、夢から覚めたら顔も知らない男性と結婚しなければならぬことも、お姫さまは分かっていました。

それでも、牢につながれたままの恋人のために、一刻も早くこの夢から抜けだそうとしていたのです。

けれど出口どころか明かり一つ見えません。

お姫さまが疲れて少し立ち止まった瞬間です。

どこからともなく現れた茨が一瞬でお姫さまを絡め捕り、身動きできなくしてしまつたのです。

指一本動かず、助けを呼ぶことすら出来ません。

このまま、お姫さまは夢の中に閉じ込められてしまうのでしょうか？
恋人は、ずっと牢屋に入れたままなのでしょうか？

真つ暗な闇の中で、お姫さまは声もなく泣き出してしまいました。

『泣かないで。今助けてあげるわ』

お姫さまの涙がこぼれ落ちたとたん、闇を払うかのような光が現れました。

純白のドレスを着た少女がお姫さまの手を優しくとります。

『そんな顔をしてしまっては、恋人に嫌われますわよ』

真紅のドレスを着た少女がハンカチーフを取り出し、お姫さまの涙を拭ってあげました。

『まったく、こんなものに囚われるとは……』

緋色の少女は茨を引っこ抜きました。あっという間にお姫さまの体が自由になります。

ですが、今度は茨が壁を作って四人を覆い、じりじりと距離を詰めてまいります。

今度は全員を飲み込んでしまおうというのでしょうか。逃げ道はありません。

視界の全てを埋め尽くそうという茨にお姫さまは怯え、白い少女にすがりつきました。

『大丈夫』

けれど、白い少女は目の前に迫る茨にまったく怯えませんでした。

微笑みを浮かべてお姫さまを優しく撫でます。

『あの茨はあなたの心の茨』

そして、お姫さまに教えるのです。

『好きな人と結ばれないのなら、このまま夢の中で朽ち果てしまいたいと願う心の現れ』

この夢の意味、茨の意味。

『辛い現実を変えられないと、諦めてしまったのね？』

全ては、お姫さまが自分の心に向かい合うために必要なことであると。

『でも、もう大丈夫よ』

茨も、夢も、現実も。

全てお姫さまの願うとおりになると、白い少女は言いました。

その間にも茨はますます多くなり、幾重にも重なって四人を包みこもうとしています。

茨がお姫さまの願うとおりになるといふのなら、なぜ消えないのでしょうか？

やはりダメなのだと、お姫さまが諦めかけた時です。

『姫さま!!』

突然、茨の一部開きました。

『僕です！ 助けに参りました!』

なんと、恋人が剣を手にして茨を切り開いています。

その雄姿たるや、まさにおとぎ話に出てくる騎士の如く。銀色の光が閃くたびに何本もの茨が束になって切り飛ばされていきます。

恋人はあつという間に道を作ってしまった。

『さあ！ 早くこちらへ!』

手招きをする恋人の姿に、お姫さまは白い少女が引き留めようとするのも聞かず飛び出そうとしました。

『お待ちなさい』

その目の前に、勢いよく金の扇が突き出されます。

真紅の少女です。

『よくご覧になって』

真紅の少女が手を軽く振います。

すると、扇の軌跡が光り輝き、その向こうに恋人の姿が見えました。

『あなたの愛する人は、あんなに醜い化け物だったのかしら？』

それは人間ではありませんでした。

何本もの茨が絡みつき人の形を作っていたのです。

『……こおちいだああ……こおちにいい……』

怪物がおぞましい声を上げてお姫さまを手招きします。その動きが先ほどの恋人の動きとまったく同じなのです。

お姫さまは恐怖のあまり声も出ません。

その様子に、正体が見抜かれたと気がついたのでしょうか。茨はバラバラにほどけてまた壁に戻りました。

先ほどの光景が忘れられないお姫さまはへたり込んでしまいました。その足に、一本の茨がこつそりと忍び寄って行きます。

今にも絡みつこうとした瞬間です。

『なぜ、そう簡単に諦める？』

緋色の少女が茨を踏みつぶしました。

『好きなのだろうか？ 愛しい相手と結ばれたのだろうか？』

緋色の少女がお姫さまの手をとり、無理やり立たせます。

『ならば諦めるな！ どのような手段を使おうと、どのような障害が立ちふさがろうと、欲するものを手にするまで必死に抗い続けるんだ！』

初めて正面からしかと見据えられた、その瞳。

『お前が諦めないというのなら、私が策を授けてやる』

燃えるような情熱を宿した緋色の瞳が、お姫さまをじっと見据えているのです。

『選べ。ここでこのまま茨とともに朽ち果てるか。それとも、その足で現実に立ち向かい真に愛しい人を手に入れるために戦うのか』

少女はお姫さまに決断を迫りました。

『お前は、どちらを願うんだ？』

一切の嘘偽りを許さない炎のような少女がお姫さまを見つめています。

いいえ、緋色の少女だけではありません。

純白の少女も、真紅の少女も、何百何千という茨さえも動きを止めて、お姫さまの答えを待っているのです。

お姫さまの本当の願いをかなえる、ただそれだけのために。

お姫さまの心の中には大きな不安がありました。

たとえどのような言葉を尽くそうと、態度を示そうと、王さまが二人の仲を許してくれるとは思えないのです。

このまま目が覚めたら、今度こそ結婚させられてしまつてしょう。
おそらく、恋人とももう二度と会えません。

それなら、夢の中、茨でできた恋人とともに朽ち果てるのも悪くないかもしれません。

茨が揺れ動きます。

再び恋人を形作り、本物と同じ優しい笑みを浮かべます。

茨がお城になり、侍女を、お姉さまを、王さまを、王妃さま——国中の人々を作っていきます。

誰もが笑顔で、誰もがお姫さまと恋人を祝福してくれる夢の国、茨の王国が出来上がりました。本当に本物そっくりです。

その間も、少女たちは動かず、じっとお姫さまを見つめていました。

茨でできた恋人が手招きをします。愛しい人が、お姫さまの名前を呼びます。

お姫さまはゆっくりと歩き出しました。

国中の人々が、拍手で迎えます。

そして、目の前に立ったお姫さまをエスコートしようと、恋人が手を差し出しました。

お姫さまは恋人の頬を引っぱたきました。

「私が好きな人はただ一人です。姿かたちが似ていようと、あなたと共にいたいとは思いません」

茨の国は崩れ始めました。

振り向いたお姫さまに、薔薇の少女たちは微笑みながらお城の中央を示します。

何本もの茨が次々と剥がれ落ちていくお城の中で、紫がかって見えるほど濃い紅のドレスを着た少女が眠っていました。

小さく丸まっていた濃紅の少女が、立ちあがってお姫さまの前に歩いてきます。

恥ずかしそうに顔を真っ赤にしていますが、きちんと礼をしてから話し始めました。

それは濃紅の少女以外誰も気づいていなかった、お姫さまの恋を叶えるための『恥ずかしがりや』のお話でした。

第六輪：『秘密』

牢屋に繋がれたままの恋人のもとに、一つの影が近づいていきます。侍女がふたたびこっそりやってきたのです。

侍女に気づいた恋人がお姫さまの様子を尋ねます。頬がこけ瞳に光もない、焦燥しきった様子でした。もう一週間も眠り続けているお姫さまが心配で心配で、食事も喉を通らず夜も眠れない程だったのです。

侍女は笑顔とともに薔薇を差し出しました。

真っ赤な薔と、青い薔薇と、大輪のピンクの薔薇。

侍女がお城中を駆け回って集めた三本の薔薇でした。目覚めたお姫さまが恋人に渡してきて欲しいと侍女に頼んだのです。

侍女が快くお願いを受け入れた後、お姫さまは青い瞳の女性に診察をしてもらっています。ですがとても健康そうで、ずっと輝くような笑顔を振りまいていました。

侍女からお姫さまの様子を聞き、無事に目覚めたのだと知った恋人は、安心のあまり意識が遠くなっていきました。この一週間、ほとんど寝ていないのだから当然です。

恋人が眠りに落ちる瞬間、薔薇の香りに包まれているような不思議な感じがしました。

気がつくと恋人は不思議な場所にいました。

全然知らない場所に立っていて、目の前では三人の女性がお茶会を楽しんでいるのです。

椅子の上に立ち上がってお茶を注いでいた赤毛の小さな女の子が恋人に気がつきました。

『わあ、やつと来てくれたんですね!』

満面の笑みを浮かべて出迎えてくれます。

次に、青いドレスを着た女性が声をかけてきます。

『おめでとう。これであなとも……ね』

呟くような言ったので良く聞き取れませんでした。祝福してくれているのが分かる温かい言葉でした。

『どうぞ座ってくださいな。ぜひあなたにお話したいことがあるんです』

奥に座ってにこにこ微笑んでいた女性が恋人に席を勧めました。赤毛の女の子がすぐに椅子を持ってきてくれたので、恋人もお茶会に混ぜてもらうことにしました。

そして恋人は、薔薇の花束に込められた『秘密』を知ったのでした。

「……待ってくれ」

崩れ落ちるように眠った恋人を残し、侍女がお姫さまのもとへ帰ろうとした時です。

恋人が侍女を呼び止めました。

今眠ったばかりだったはずなのにどうしたのだろうと、侍女は不思議に思いながら振り返り、その姿を見て驚きの声を上げそうになりました。

先ほどまでの疲れきった様子は一切ない、凜々しく精悍な顔つきの恋人が立っていたのです。

「僕をここから出してほしい」

侍女は迷います。お姫さまからもう一つお願いをされていたのです。もしも恋人が牢屋から出してほしいと願ったのなら、そのとおりにしてほしいと。

ですが、牢屋から出せば恋人は竜を倒しに行くに決まっています。そうなれば恋人は死ぬでしょう。お姫さまは投嘆き悲しみ、今度こそ覚めない眠りについてしまうかもしれません。

悩む侍女に恋人は言いました。もう竜に挑んだりしないと。

「僕は彼女の為に生きなければならない。生きて続けて、彼女の傍に居てあげなければならぬと気づいたんだ」

そう告げた恋人の言葉には確固たる決意がありました。

侍女は、牢屋の鍵を開けました。

牢屋から出た恋人は、そのまま王さまに会いに行きました。

その堂々とした立ち居振る舞いにお城の兵士達は気後れし、誰も恋人の行く手を遮ることができません。

とうとう玉座に座る王様へ謁見をはたし、改めて頭を垂れて結婚の許しを請うたのです。

王さまは激怒しました。牢屋を開けた者も含めて、今すぐその首をはねてやると言いました。

同行していた侍女は、恐怖のあまり顔を真っ青にして震えだしてしまいました。

けれど、恋人は全く怯みません。

逆に王さまを見据えて、僕はここで死ぬわけにはいかないのですとはつきりと言います。

「彼女のためにも、どうか結婚を許してください」

図々しいことを言い放つ恋人に、ついに王さまが剣を引き抜きました。

自らの手で引導を渡してやろうというのです。

豪華な部屋の中にあられた白刃の輝きに、居並ぶ家来達が色めきたちます。

「結婚を許してください」

目の前に立った王さまに向けて恋人は三度同じ言葉をいいます。

その耳障りな口を塞ぐと、王さまは剣を振り下ろしたのでした。

s e e d s

「やめて!!」

まさに恋人が切られようとした瞬間です。

お姫さまが恋人に飛びつき、二人して床に倒れました。お姫さまの美しい髪が数本、剣に断たれて宙に舞います。

数瞬でも遅れていたら二人とも死んでいたかもしれません。

……カラン

王さまの剣が床に落ち、澄んだ音を立てました。あと少しのところ
で娘を切り殺すところだったのです、衝撃のあまり剣を取り落とし
てしまったのでした。

床に倒れこんだ恋人とお姫さまがゆっくりとした動作で立ち上がり
ました。二人の瞳に恐怖の色は見えません。

殺されかけた二人が毅然として立ち上がり、殺しかけた王さまが恐
怖にわななき震えているのです。その様子に、王さまだけでなく部
屋の中の家来達さえも気圧されててしまいます。

「……お父様……」

お姫さまは一步王さまに進み出ました。王さまが逆に一步下がりました。
お姫さまがもう一步進むと、王さまは今度は二歩下がりました。
またお姫さまが進み出ます。王さまはじりじりと後ずさり、玉座に
ぶつかって座り込みました。

本来ならば、玉座に座る王様がこの部屋の、この国の中心なのです。
ですが、今この瞬間、お姫さまは全ての中心に立っているのです。

お姫さまは笑顔を浮かべて言いました。

「私、この人と結婚します」

優雅で誇り高く、見るものの心を捕えて離さない微笑み。

大輪の薔薇が咲いたかと思紛うような美しさに誰もが見惚れてしまいます。

「ならん！ 儂は絶対に認めんぞ！！」

ですが、一人だけお姫さまの言葉に反対する人がいました。

もちろん王さまです。玉座にしがみつきながら認めないと叫びます。お姫さまの気持ちも恋人の誠実さも、王さまはすでに十分わかっていました。が意地になっているのです。

そして、王さまが反対すればお姫さまは従うだろうと思っていました。

「お父様」

けれど、お姫さまの静かな一言が王さまの叫び声を止めてしまいました。

従わずにはいられない——この言葉を聞かなければならないと思わせる何かが、お姫さまの言葉にあったのです。

「これまで私は、お父様という大きなお方によって育てられてきました。……いえ、お父様だけではありません」

お姫さまは部屋の中を見渡し、王さまの家来達に向かって頭を下げます。

「この城に、この国に住む人々から向けられる愛情を感じ、ただた

だ無邪気に笑うことだけを許された何も知らない子供だったのです」

騒ぎを聞きつけてやってきたお姉さまと王妃さま、それに青い瞳の女性が部屋に入ってきました。何が起きているのかと目を丸くした二人にも頭を下げます。

「お母様にもお姉さま方にも感謝しています。大切にされてきた日々には何の苦しみもなく、不自由もなく、あたたかい温室の中でまどろんでいるような、とても素敵な日々でした」

いつもすぐ近くにいてくれた侍女にも微笑みかけ、お礼を言います。

「ありがとう。あなたがいてくれなければ私はもっと前に諦めてしまっていたわ。あなたが支えてくれたから、私はこうしてお父様の前に立つことができたのよ」

そして、王さまに向かって、誰よりも長く、深々と礼をしました。

「本当に、お父様には大変感謝しています。この夢のような素晴らしい国はお父様のもの。花のように蝶のようにと可愛がっていただし、お父様と遊んでいた時、私はいつも笑顔でいた記憶しかありません」

お姫さまの声がわずかに湿っていました。

光る粒が二滴、床に敷かれた絨毯に落ちて染み込んでいきます。それを見た侍女が駆け寄ろうとしますが、恋人が首を横に振って止めます。その真剣な表情に侍女の足が止まりました。

「どれほどの言葉を尽くしても、この気持ちを言い表すことなどできません……」

お姫さまは時おり嗚咽を漏らし、小さな肩が震え、見るものの胸を締め付けるほどです。

それでも、恋人は見守り続けるのです。

お姫さまの強さを信じているのです。

「……けれど、お父様。私は花ではないのです」

お姫さまは一人で、誰にも支えられることなく顔を上げました。

誰もが息をのみました。そこにいたのはもはや、無邪気に愛されるだけの少女ではなかったのです。

儚く愛らしかったお姫さまは、いつのまにか美しく気高い一人の女性へと成長していました。

「私が愛する人は、私が決めます」

その変化はまるで薔が花開いたかのようです。

誰にでも微笑を浮かべるの花ではなく、ただ一人のために咲き、手折られる花の如く。

豪華で優美で艶やかな、愛に溢れる薔薇の花ようでした。

「私は本当に大切なものを見つけることができたのです」

恋人がお姫さまに寄り添い、その手をとって頷きました。

薔薇に教えてもらった『秘密』を、今こそ口にする時がきたのでした。

お姫さまはとても嬉しそうな笑顔で告げました。

「私、この人の赤ちゃんができたのです」

……そして二人は王さまに一礼し、ゆつくりと出口に向かって歩いていきました。

とても嬉しそうに微笑み合い、ようやく手にした幸せを決して離さない様にしっかりと握り締め、王さまと王妃さまと、お姉さまと友人と、その他の多くの臣下たちに見守られながら、二人はこの国を後にしようというのでした。

………

誰も止めません。驚きのあまり一言も発することができないのです。王さまさえも一歩も動くことが出来ませんでした。

沈黙が満ちるその部屋の中、一人の小さな影が動きました。

……ぱちぱち……

侍女が小さな手を一生懸命動かして、二人に拍手を贈ります。ポロポロと涙を流しているのに、とっても嬉しそうな笑顔です。

……ぱちぱちぱちぱち……

お姉さまも、お姉さまの友人も一緒になって拍手をします。

……ぱちぱちぱちぱちぱち……

王妃さまも、王さまの家来たちも、みんなが拍手を贈ります。雨のように降り注ぐ祝福の音を聞きながら、二人は扉を開けて広い世界へと飛び出していこうとしました。

………ぱち………ぱち………ぱち………

けれど、お姫さまの足を止める音が一つ。

お姫さまは振り返りました。そして、その目に懔然とした表情で手を叩く王さまの姿が映ったのでした。

涙をこぼすお姫さまを支え、恋人が踵を返します。

国中に響き渡るような歓声と拍手が二人を迎えました。

その後のお話です。

国をあげてで準備していた結婚式は、花婿を恋人に変えてそのまま盛大に行われました。

お姫さまに赤ちゃんができたという事は一応伏せられていましたが、それはそれは素晴らしい結婚式で、国中の人々が二人を祝福したのでした。

それにあわせて、もう一つお話があります。

お姫さまと恋人を結んでくれた七本の薔薇は、侍女がまとめて素敵なウエディングブーケを作ってくれました。
赤い薔薇も見事に咲いたそのブーケ。

お姫さまが天高く放り投げると、数え切れないほどたくさんの薔薇の種になって国中に散ってしまったのです。

種はいろいろなところに飛んでいきましたが、そのためでしょうか。

恋する女性のもとへ七つの薔薇の種が訪れ、その花を無事に咲かせると恋が実するという、とても不思議なお話がそこかしこで囁かれるようになったのです。

今でも薔薇を育てる女性が多いのは、このお話を聞いて恋の成就を願っているからなのかもしれませんね。

けれど、女性の手元に届かなかった薔薇の種もたくさんあったのです。

そしてその種から多くの芽が出て茎がのび、葉を茂らせ蕾をつくりお姫さまが赤ちゃんを産んだ日に、一斉に花を開かせたのでした。

こうして、むかしむかしあったとある国はいつしか薔薇の国と呼ばれるようになり、美しい薔薇と大好きな人たちに囲まれながら、お姫さまはいつまでもいつまでも幸せに暮らしたのでした。

くおわりく

seeds (後書き)

これにてこのお話は終了です。

今回は花言葉がすごく多かったので、知りたい方は『秘密の薔薇の秘密』をご覧ください。

「秘密の薔薇の秘密」

『秘密の薔薇をあなたに』の解説です。

薔薇の花についてはいっぱいお話があるので、参考にしたものを全部書いています。

「私に薔薇についてを語ろうなど百年早い！」という方でなければ、何かしら新しい発見があるのではないでしょうか。

【薔薇の言い伝え】

薔薇は昔からいろいろな言い伝えがある花です。

ヨーロッパでは海から美と愛の女神アフロディーテが生まれたのに対して、同じくらい美しいものとして大地からは薔薇が生まれたと言われています。美と愛の花なのです。

また、キリスト教では聖母マリアが薔薇の花にヴェールをかけると花が純白に変わり、以後白い薔薇しか咲かなくなったそうです。このことから白い薔薇は純潔の意味も持ちました。

この話だけではなく、たくさんの人に愛され様々な品種、色合いが作り出されてきたこの薔薇という花には多くの意味や象徴、花言葉が隠されているのです。

主な花言葉『愛、恋、美、幸福、乙女、秘密、無邪気、清新』

【bud】

蕾という言葉です。

薔薇に限りませんが、これから成熟していこうというbudには『純潔、春、未成熟、未成年、小娘、社交界に出たばかりの娘』という意味があるのです。

また、秘めた想いを薔薇の蕾に込めて贈るというロマンチックなお話もあつて、蕾が花開く時に恋が叶うことを願います。

初恋は白い薔薇の蕾、大人の恋は真っ赤な薔薇の蕾。
真っ赤な薔薇の蕾の花言葉は後でまた紹介します。

本編では、最初ただのプロローグという言葉を使っていたのですが、イメージに合うので途中から変えてみました。

【三つの蕾と満開の薔薇】

『あのことは永遠に秘密』『お互いに永遠に秘密にしましょう』という意味があります。

後でも書きますが薔薇には『秘密』という花言葉があるのです。この場合、花と蕾の組み合わせであれば色は関係ありません。

【白と赤の薔薇の花束】

イギリスのばら戦争の象徴である、赤薔薇と白薔薇。

この二つをあわせると『調和』という意味になります。

それにあわせて、白と赤の薔薇の花束を異性に贈ると『結婚してください』という意味になります。

プロポーズの時に渡されるなら、一輪の真っ赤な薔薇と赤白の二色の薔薇の花束、どっちがいいですか？

【白い薔薇】

第二輪の薔薇。聖母マリアの伝説にあるような純白の薔薇です。純潔の象徴として『心からの尊敬、無邪気、清純、純潔、私は処女、恋の吐息』という花言葉が並びます。

でも、この作品で出てくる薔薇は恋人からお姫さまへ贈られたプロポーズの薔薇です。ですので使わせていただいた花言葉は別のもの。白い少女の言葉、『私はあなたに相応しい』が花言葉です。

ちなみに白い少女はあの四人の中では一番年上。ちっちゃな薔薇たちの面倒を見てくれる上品で優しいお姉さんです。

ふるさまに描いていただいた挿絵ではお茶を注いであげていて本当に優しそうですね。

【真紅の薔薇】

第三輪の薔薇。鮮明な赤、真紅の薔薇です。

薔薇は色によって花言葉が違いますが、赤薔薇と紅薔薇ももちろん別々の花言葉を持っています。

『死ぬほど恋いこがれています』が紅薔薇の花言葉。愛と情熱のメッセージを抱いて咲く花なのです。

作中に出てくる真紅の少女は、どこまでも愛した人を信じ続ける強さを持っています。

実は、鮮やかな花弁が美しく堂々としていても、丁寧に育てないとすぐにダメになってしまう気難しがりな高級花がイメージ。

愛が足りないとすぐに枯れてしまいまう彼女の存在そのものが、二人の想いの証だったのです。

表紙・挿絵ともに、いつも偉そうにしている姿が可愛いです。

【薔薇の下】

『under the rose』。直訳すると『薔薇の下』。アフロディーテが浮気をしたことを秘密にしてもらう為に、沈黙の神ハルポクラテスに薔薇の花を贈ったのです。

このことから薔薇には『秘密』という花言葉が生まれたのですが、『under the rose』という言葉の起源そのものはローマ時代なのです。この時代には、天井に薔薇の花を吊るし、その下で話したことは全て秘密にするという習慣があったのです。このことから『薔薇の下』という言葉にも『秘密』の意味ができたのです。

でも、参加者が黙っても薔薇がおしゃべりしてたら意味がないですよ。ね。

【緋色の薔薇】

第四輪の薔薇。濃くて明るい赤、緋色の薔薇です。

緋色の花言葉は『陰謀』。そして、『情事、灼熱の恋』。大人向けですね。

緋色の少女はクールなメガネっこで一見冷たそうですが、実は真紅の少女以上の情熱家。

自分でそれを自覚しているから普段は冷めた様子を繕っているのですが、好きな人を手に入れるためならば手段は選ばず、策謀を巡らせ必ず恋愛を成就させようとしています。

怖く美しい笑みが似合う危険な香りがする少女です。

ちなみに、表紙で大事に抱えている箱？それとも本？がなんなのか作者にも謎です。でもそういう謎めいているところもいいですね。

【thron】

棘、茨の意味です。

この棘、持つと手に刺さるだけの邪魔者に見えますが、ちゃんと花言葉があるので。

『不幸中の幸い』。それが薔薇の花を守る棘にピッタリかもしれませんね。

また、棘ない薔薇は『プラトニック・ラブ』を意味するそうですが、この物語にはものすごく大きな棘がありました。

ですので、棘のついた薔薇『心配のまじった恋の希望』。

棘のついた満開の薔薇『結婚』という花言葉になります。

薔薇から花開いた、お姫さまのためにあるような花言葉なのです。

【濃紅の薔薇】

第五輪の薔薇。紫がかって見えるほどに濃い紅色をした薔薇です。最後に花開いただけあって、この薔薇の花言葉は『内気な気恥かしさ』といます。

作中の第一輪で四人の薔薇たちの姿が出ていますが、お姫さまが言葉交わす少女は一人ずつ増えていきます。これは真紅・緋色・濃紅の三人が薔であったから。

彼女たちが伝えるべき『言葉』は、【薔】ではなく【花】になってはじめて意味を持つものだったのです。

誤解しないでほしいのは、濃紅の少女は恥ずかし屋さんではあっても決して臆病でも無口でもないということです。最後に花開いた彼女は伝えるべき『言葉』をきちんとお姫さまに伝えれることができました。それは濃紅の少女は大事なことを伝えることができる勇氣を持っていたから。そして、彼女たちの『言葉』にきちんとお姫さまが耳を傾けたから。

茨は本当は濃紅の少女の『言葉』を閉じ込めていたのではなく、彼女の言葉に耳を傾けようとない心の現れだったのです。

たとえ『内気』であろうと、【花】は常に話しかけてくれているのです。

挿絵では仲間たちとお茶をしながら、ちょっと楽しそうにしている表情が可愛いです。ちなみに、いつもは表紙のように真紅の少女の後ろに隠れています。二人は姉妹みたいな関係です。

【一つの薔と満開の薔薇が二つ】

これは最初の花束の別バージョンです。

花言葉は『秘密』『あのことは当分秘密』。永遠にと言わないのは、一つ残った薔が花開く頃に秘密は秘密でなくなることでしょう。うか。とってもロマンチック。この言葉も薔薇の色は関係ないです。

【赤い薔薇の蕾】

赤い薔薇の花言葉はたぶんみなさんも知っていますよね。

『愛情、美、情熱、熱烈な恋、あなたを愛します、私を射止めて、貞節、模範的、あなたを愛しています』というような情熱的な花言葉の数々。さすが愛の花の代名詞です。

ですが、今回の花束ではまだ蕾です。

真紅・緋色・濃紅の少女は蕾のままでは『言葉』を持っていませんでしたが、赤い薔薇の蕾にはきちんと用意されているのです。

『純潔、あなたに尽くします』。これが赤い蕾の花言葉です。

実は二つ目の花束のキャラクターは最初からちよこちよこ登場しています。赤毛で小さくてちよこつとドジで、でも一生懸命に二人に尽くしてくれる侍女が赤い蕾です。

最後の挿絵でお茶を注いでいる姿が大変可愛らしくてお気に入りです。ドローイングが見えているところもご愛敬。

【青い薔薇】

もともと青い薔薇はありません。青い色素が花から見つからないので、青い薔薇を作るのは不可能とされていました。

ですので青い薔薇は昔は『不可能』『ありえないもの』の代名詞でした。

ところが、近年の園芸家の方の努力やら科学技術の遺伝子組み換えやらで、とうとう実現してしまったのです。

人間の英知の結晶とも言うべき青い薔薇。新しくつけられた花言葉は『奇跡、神の祝福』。

人間は自分の手で『奇跡』さえも作り出せるということなのですかね？

本作ではもちろん、金の髪と青い瞳をしたお姉さまの友人です。

彼女は作中で竜を倒す旅に一緒について行くことを申し出ましたが、実在の人物がモデルです。フランスの救国の聖女、ジャンヌ・ダルクです。

もちろん私の勝手なイメージでしかないのですが、イングランドとの戦争に敗北しそうになったフランスのため、王太子シャルルを助けるジャンヌの姿を青い瞳の女性に重ねています。

『神の祝福』を受けたのと言って『奇跡』の如く戦場で勝利を重ね、『不可能』とさえ思われていたオルレアン解放を果たす少女にこそ青い薔薇が似合うのではないでしょうか。

でも、作品中では竜に出会う前に帰ってきてもらいました。人間は竜には絶対に敵わないという設定なので、旅に出ると確実に死ぬからです。

ちなみに竜はキリスト教で悪魔の象徴、ジャンヌ・ダルクは最後魔女の烙印をおされて火刑に処されました。このあたりも無駄に設定にこってみました。

普段は修道女として神に仕えていて、そこで医者の仕事もしています。

【ピンクの薔薇】

ピンクの薔薇です。

『上品、気品、温かい心、美しい少女、恋の誓い、輝かしい、しとやか、満足』というような意味があります。

ですが作中にでてきたピンクの薔薇はただの薔薇ではなく、大輪のピンクの薔薇です。

花言葉は『赤ちゃんができました』。

ちなみに、最後の一人、ピンクの女性はお姉さまです。

挿絵の優しそうな表情がいいですね。私もこんなお姉さまがほしいです。

【s e e d s】

種です。

種とは言いますが、もちろんただの種ではありません。

s e d dという言葉には『子孫』という意味もあります。

【ブライダルフラワー】

『幸福な愛』という意味になります。

バラのブーケとか素敵ですね。

【その他・イメージ】

お姫さま 棘のついた大輪の真っ赤な薔薇

恋人 黒薔薇

王さま 黄薔薇

……というわけで本編のどの話よりも長い解説もこれにて終了です。
薔薇の花言葉、少しは覚えていただけたでしょうか？

感想等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5564g/>

秘密の薔薇をあなたに

2010年10月9日00時07分発行